

# 日本語における混成語のアクセント

## —— 右側主要部規則との関わりに基づく分析 ——

### Accentuation of blends in Japanese: Analysis from the viewpoint of Righthand Head Rule

永 富 央 章

(Hiroaki Nagatomi)

#### I はじめに

本論文では、日本語における混成語形成において、その出力形のアクセントがどのように決定されるのかを、主に右側主要部規則 (Righthand Head Rule (Williams 1981)) の視点から分析する。英語との対照を通じて日本語の混成語を分析した先行研究には、特に右側要素の長さが混成語全体に継承されるという点で、混成語形成に右側主要部規則が関与するという指摘がある。しかしながら、日本語の混成語における右側主要部規則とアクセントとの関係には不明な点も多い。本稿では、135 語の混成語を対象とした分析から、アクセント付与にも右側主要部規則が関与することを指摘する。具体的には、日本語のデフォルトアクセント規則といえる外来語アクセント規則による混成語アクセントの説明率は 66%であるのに対し、右側要素のアクセント継承による説明率は 76%と、より多くの語が右側要素のアクセントから捉えられることを報告する。

#### II 混成語の形式とアクセントに関する先行研究

##### II-1 混成語とは

混成 (lexical blending) とは、2 つの語の一部ずつを組み合わせる新しい語を形成する語形成プロセスの一種で、日本語のみならず、英語 (Kubozono

1990, Bauer 2012) を含めた幅広い言語に観察される。以下 (1), (2) に日本語、英語の混成語をそれぞれ例示する。

- (1) ゴリラ / クジラ → ゴジラ  
ダスト / ぞうきん → ダスキン  
ママ / ドラゴン → ママゴン
- (2) smoke / fog → smog  
breakfast / lunch → brunch  
Britain / exit → Brexit

混成に似た語形成プロセスとして複合語短縮 (compound clipping) があるが、通常、複合語短縮は第一要素と第二要素の前半を組み合わせた形が出力形になる。これに対し、混成では第一要素の前半と第二要素の後半を組み合わせた形の出力が一般的である (窪 蘭 1995: 146)。(1), (2) をみると、どれも第一要素の前半と第二要素の後半が出力形に継承されている。例えば、「ゴリラ」と「クジラ」から両要素の前半どうしを組み合わせる場合「ゴリクジ」となるが、このような構造は一般に複合短縮と呼ばれ、混成とはみなされない。

ただし、混成語は明確に定義するのは難しく、混成語とそうでないものを隔てる境界をどこに置くのかについては議論がある (Renner et al. 2012)。「第一要素の前半と第二要素の後半を組み合わせたもの」という定義についても、たとえば (1) の「ママゴン」は第一要素の全体が混成語に継承されている。『明解言語学辞典』(斎藤・田口・西村編 2015) では、混成とは「複数の語から一部ずつ切り取って新しい語をつくること」と説明されており、語のどの部分を切り取るかについては具体的に示されていない。

本稿では基本的に、第一要素の前部と第二要素の後部を組み合わせた語を混成語と考える。ただし、「ママゴン」のようにどちらかの要素がそのままの形で (一部を切り取られずに) 使用されていたり、「オシンドローム (おしん+シ

ンドローム)」のように語の一部を重ねることによって両方の要素が原語のままの形で用いられているような語も、混成語として分析対象に含める。

## II-2 日本語の混成語に関する先行研究

### II-2-1 混成語の形成にかかる制約に関する議論

混成は、日本語にみられる多様な語形成プロセスの中でも比較的複雑な操作である。2つの原語をそのまま組み合わせる複合や原語の一部を削除する短縮とは異なり、混成では、単に2語を組み合わせるだけでなく語の一部を切り取るという操作も行われる。日本語の混成語に関してはこれまで、アクセントのような現象よりもむしろ、その構造や形成規則、結合点の位置等、混成語そのものの形成にかかる音韻的制約について議論が成されてきた(窪菌 1995, 太田 2003 など)。

ここでは、混成語形成について、英語の混成語形成と日本語の混成語形成との比較を通して体系的な分析を行った Kubozono (1990), 窪菌 (1995) による議論について概観する。窪菌 (1995) は、意識的な混成語(話者が意識的に形成した混成語)と無意識的な混成語(言い間違えなどにより無意識的に生じた混成語)の両方を用いた調査の結果をふまえ、混成語の適格性について以下の2つの制約の存在を指摘した。

- (3) i. 結合点の制約: 左側・右側の各要素は音節境界ではなく、  
モーラ境界で分割される。
- ii. 長さの制約: 右側(第二)要素の長さが出力の長さになる  
( $AB / XY \rightarrow AY$ において、 $XY_{LENGTH} = AY_{LENGTH}$ )。

窪菌 (1995) は、この2つの制約が存在することを指摘した上で、日本語の混成語に、主に音韻的な観点において右側主要部規則 (Righthand Head Rule: RHR (Williams 1981)) が関与していると考察している。右側主要部規則は主

に形態や統語、意味に関して用いられる概念で、複数の形態素を用いた語形成において、意味や品詞の決め手を右側の要素が担うというものである。意味や品詞に関しては、混成語は並列的な構造を保つ場合も多く、一般的な意味での右側主要部規則は当てはまらないケースが少なくない。窪菌 (1995) は、形態・意味よりもむしろ音韻的な観点において右側要素が重要な役割を担うと指摘している。例えば、(3ii) の長さの制約は、右側の要素が語全体の長さを指定する役割を担うという規則である。またこの他にも窪菌 (1995) は、混成語の多くで右側要素のほうが左側要素よりも長くなりやすいことを指摘している。

## II-2-2 混成語のアクセントに関する議論

混成語のアクセントについて、窪菌 (1995) は、「右側主要部規則の観点からみれば、右側要素のアクセント構造が混成語のアクセント構造に継承される可能性は大きい。とりわけ日本語のアクセント型は語の長さと同関係をもっているため、右側要素の長さを継承する混成語は同時にアクセント型も継承すると思われる」と述べている。ただし、同時に以下 (4) のような例を挙げて、実際に混成語をみるとこれに反する例も多いとし、混成語のアクセント傾向についての分析は今後の課題としている (以下、例における ' はアクセント (ピッチの下がり目) の位置を、<sup>0</sup> は平板型であることをそれぞれ示す)。

- (4) ゴリラ / クジラ<sup>0</sup> → ゴ'ジラ  
 ダスト / ぞうきん<sup>0</sup> → ダ'スキ

また、Broad (2015) は日本語の混成語についていくつかの仮説を立て、調査を基にそれらの仮説を検証した。Broad (2015) によるいくつかの仮説のうち、重要なものとしては、Kubozono (1990) の日本語と英語において右側要素が混成語の長さを決め、音韻的な主要部としてふるまうという指摘を基にした、「全ての混成語において右側要素がアクセントを決める」という仮説や、品詞

と意味の観点からみた主要部 (head) がアクセントを決める、といった仮説がある。Broad (2015) は調査の結果から、主要部 (head) のアクセント型が保存されること、また (意味・形態的に) 並列の混成語においては単純語のアクセント規則によってアクセントが決まることを指摘した。先に述べたとおり、窪菌は品詞や意味ではなく音韻的な観点から右側要素が重要な役割を担うと指摘している。これに対し、Broad (2015) の結論における主要部 (head) は品詞と意味の観点から分析したものである点に注意が必要である。

### II-2-3 混成語のアクセントに関する問題点

Broad (2015) の分析は様々な先行研究に基づく複数の仮説を検証している点で興味深いものの、語の長さや語種があまり考慮されていない。特に、右側主要部規則に関する Kubozono (1990) の指摘を踏まえた仮説を立てているものの、(3) の長さの制約に関する分析はなく、長さの制約を守るか守らないかに関わらずすべての語が右側主要部であると仮定して一つの仮説を構築している。別の仮説では品詞と意味の面から主要部を求めているため、先の窪菌 (1995) の RHR に関する予測とは必ずしも対応しない可能性がある。以下 (5) は Broad の挙げた混成語の例である。(5a) は Broad による新奇語である。

- (5) a. 沖縄<sup>0</sup> / 眺め<sup>1</sup> → おきながめ<sup>1</sup> (主要部のアクセントが残る例として)<sup>1</sup>
- b. バカ / アホ → バホ (並列の例として)
- c. ポテト / トルネード → ポテトルネード (左側主要部の例として)

窪菌 (1995) のデータをみても、全ての混成語が長さの制約を守るわけでは無いため、混成語の音韻的な面からみた主要部とアクセントとの関係を分析するためには、語の長さについても検討する必要がある。こうした背景を踏まえ、本稿では新たに収集した混成語を対象としてそのアクセント位置について分析を行う。そのうえで、日本語の混成語が音韻的には右側主要部規則

(Righthand Head Rule: RHR) に従うという窪菌 (1995) の主張を踏まえ、日本語の混成語アクセントは基本的には第二要素 (右側要素) のアクセントを継承すること、RHR に違反する場合は外来語アクセント規則の影響でアクセントが決定されることを指摘する。

### Ⅲ 混成語アクセントの調査・分析

#### Ⅲ-1 分析の対象

先行研究や辞書、インターネット上のページなどから、意識的な (スピーチエラーによる産出ではない) 混成語を収集した。このうち、前部要素と後部要素がともに和語もしくは漢語である例が一部存在した。和語や漢語は 1 形態素の長さが外来語より短く、アクセントの予測性も外来語より低い。短すぎる語では入力と出力におけるアクセント位置の関係性が確認しづらくなってしまいうことから、本調査では、ある程度の長さを確保するため、またアクセントの予測性を高めるため、2 つの構成素がどちらも和語・漢語であるものを除外した。その結果得られた、どちらかの構成素、あるいは両方の構成素が外来語であった 135 語を分析の対象とした。

アクセントの判断は、1 名の東京方言話者に調査語リストを読み上げてもらい、筆者がそれを聴取することで行った。リストには調査語に加え、前部・後部要素の原語を、さらに馴染みが薄いと考えられる語にはその備考として意味などその混成語についての情報を付した。

#### Ⅲ-2 分析の結果

先にも述べたとおり、窪菌 (1995) は日本語の混成語が音韻的観点で RHR に従うことの 1 つの根拠として、「長さの制約」の存在を挙げている。右側要素の長さが全体の長さを支配するという制約である。音韻的主要部のアクセントが継承されるのかといった点について議論するには、まずは本データにおいてもこの制約が守られているかどうか、もし守られているとしてどの程度守ら

れているかを確認する必要があるため、はじめに今回収集した混成語が長さの制約に従うかどうかを確認する。以下表 1 にその結果を示す。

表 1: 意識的な混成語における長さの制約

	語数	割合
a. 長さの制約を守る (第二 (右側) 要素の長さを保存する)	68	50%
b. 長さの制約を守る (第一 (左側) 要素と第二 (右側) 要素の長さが同じ)	25	18%
c. 長さの制約を守らない (第一 (左側) 要素の長さを保存する)	4	3%
d. 長さの制約を守らない (その他)	38	28%
計	135	100%

表 1 において、a. は第二要素の長さが保存され、かつ第一要素の長さは無視されたもの、b. は入力において両要素の長さが同じであったもの、c. は第一要素の長さが保存され、第二要素の長さは無視されたもの、d. はどちらの要素の長さも継承しなかったものの数と割合をそれぞれ示す。以下 (6) にそれぞれの語例を挙げる。

- (6) a. リ'ンス / シャ'ンプー → リ'ンプー  
 アグ'リカルチャー / インフレ<sup>0</sup> → アグフレ<sup>0</sup>  
 ド'ラマ / バラ'エティー → ドラ'エティー
- b. ゴ'リラ / クジラ<sup>0</sup> → ゴ'ジラ  
 ネット<sup>0</sup> / オカマ<sup>0</sup> → ネカマ<sup>0</sup>  
 ボラ'ンティア / アルバイト → ボラバイト
- c. グロ'ーバル / ロー'カル → グロー'カル  
 ご'はん / パン → ゴ'パン  
 サラ'リーマン / ウ'ーマン → サラウ'ーマン
- d. レ'ター / ファ'ックス → レタ'ックス

ピアノ<sup>0</sup> / ハーモニカ<sup>0</sup> → ピア’ニカ  
 メ’ロディー / アコーディ’オン → メロディ’オン

表 1a, b はどちらも第二要素の長さが全体の長さとなっているため、長さの制約を満たしているといえる。a. が全体の約半数を占めているのは窪菌 (1995) のデータとも一致している。また、a. と b. を合わせると 93 語 (69%) が長さの制約を満たしており、b. と c. を合わせた場合の 29 語 (21%) を大きく上回る。このことから、本データでも長さの制約は影響力を持つと考えることができる。

次に、本データにおける長さの制約とアクセントとの関係を確認する。

表 2: 長さの制約とアクセントとの関係

	第一要素 のアクセ ント保存	第二要素 のアクセ ント保存	両方	どちら でもない	計
a. 長さの制約を守る (第二 (右側) 要素 の長さを保存する)	3 (4%)	44 (65%)	7 (10%)	14 (21%)	68 (100%)
b. 長さの制約を守る (第一 (左側) 要素 と第二 (右側) 要 素の長さが同じ)	4 (16%)	8 (32%)	8 (32%)	5 (20%)	25 (100%)
c. 長さの制約を守ら ない (第一 (左側) 要素の長さを保存 する)	1 (25%)	0 (0%)	3 (75%)	0 (0%)	4 (100%)
d. 長さの制約を守ら ない (その他)	2 (5%)	26 (68%)	6 (16%)	4 (11%)	38 (100%)
計	10 (7%)	78 (58%)	24 (18%)	23 (17%)	135 (100%)

表 2a-d の分類は表 1 と同様である。各列については、「第一要素のアクセントを保存」は第一要素のアクセントのみを継承し、第二要素のアクセントは



無視していたもの、「第二要素のアクセントを保存」は第二要素のアクセントのみを継承し、第一要素のアクセントは無視していたもの、「両方」は第一要素と第二要素のアクセントが同じであったもの、「どちらでもない」は第一要素とも第二要素とも異なる位置にアクセントを置いていたものを指す。

第二要素のアクセントを保存したものが最も多く、「両方」を含めると 78 語+24 語の計 102 語 (全体の 76%) が第二要素のアクセントを保存する。また、長さの制約を守るもの (a, b 行) の中のみでみても、67 (44+7+8+8)/93 (68+25) 語, 72%が第二要素のアクセントを保存する。各行ごとの語例は以下の通りである。

(7) 第一要素のアクセントが保存される語

ゴ <sup>0</sup> リラ / クジラ <sup>0</sup>	→	ゴ <sup>0</sup> ジラ
グラビア <sup>0</sup> / ア <sup>0</sup> アイドル	→	グラドル <sup>0</sup>
キ <sup>0</sup> ネマ / パノラマ <sup>0</sup>	→	キネオ <sup>0</sup> ラマ

第二要素のアクセントが保存される語

ジャ <sup>0</sup> イアンツ / ラ <sup>0</sup> ビット	→	ジャ <sup>0</sup> ビット
安倍 <sup>0</sup> (安倍の <sup>0</sup> ) / エコノミ <sup>0</sup> クス	→	アベノミ <sup>0</sup> クス
ネット <sup>0</sup> / エ <sup>0</sup> チケット	→	ネ <sup>0</sup> チケット

第一要素と第二要素のアクセントが同じ語

アニメ <sup>0</sup> ーション / コンプレ <sup>0</sup> ックス	→	アニプレ <sup>0</sup> ックス
バドミ <sup>0</sup> ントン / ピン <sup>0</sup> ボン	→	バド <sup>0</sup> ボン
ウォ <sup>0</sup> ッシュ / ト <sup>0</sup> イレット	→	ウォ <sup>0</sup> シュレ <sup>0</sup> ット

第一要素とも第二要素とも異なる位置にアクセントを置いていた語

コ <sup>0</sup> ミック / マ <sup>0</sup> ーケット	→	コミ <sup>0</sup> ケ <sup>0</sup> ット
デ <sup>0</sup> マ / ツイ <sup>0</sup> ッター	→	デ <sup>0</sup> マ <sup>0</sup> ッター
トラ <sup>0</sup> ベル / ト <sup>0</sup> ピックス	→	トラ <sup>0</sup> ピ <sup>0</sup> ックス

表 1 の結果から、本データにおいても窪菌 (1995) の指摘するように、大多

数の外来語において右側要素が混成語全体の長さに対する決定権を持っていることが確認できた。右側要素が音韻的主要部として混成語全体の長さを支配するならば、アクセント位置の決定においても右側要素が強い影響をもつことが予想される。これについて、表 2 の結果から、102/135 語、76%の混成語が右側要素のアクセントを継承していることが確認された。

ただし、アクセント位置の決定に他の要素が影響している可能性は否定できない。窪 菌 (2019) は、日本語の種々の語形成プロセスに関してアクセントがどのように決まるのかを、特に「どこまで入力のアアクセントに依存し、どこまでが出力の音韻構造によって決まるか」という観点から考察している。たとえば複合語では一般に入力のアアクセントが出力のアアクセントを決定する。以下の例をみてみたい。

- (8) デジタル + カメラ = デジタル・カメラ  
 コロナ + ウィルス = コロナ・ウィルス

東京方言の場合、後部要素が複合語全体のアクセントを決定する (佐藤 1989)。(8) では後部要素のアアクセントがそのまま複合語全体のアクセントとして保存されている。これに対し、窪 菌 (2019) はたとえば単純短縮語や愛称語では、入力のアアクセントではなく出力の音韻構造に基づいてアクセント位置が決定されると指摘している。(9) に窪 菌 (2019) から単純短縮語の例を挙げる。

- (9) アマチュア<sup>0</sup> → ア'マ  
 ストラ'イキ → ス'ト  
 パンフレット → パ'ンフ  
 イラストレ'ーション → イラ'スト<sup>0</sup>

出力のアアクセントが入力においてアクセントがどこに置かれるかに関わらず決定されていることがみて取れる。では、出力のアアクセントが入力のそれに依

存しないとなると、一体何によって決定されるのだろうか。平板型を除いた日本語のアクセント、特に外来語のアクセントは、以下に示すアクセント規則によってその多くが説明できる (Kubozono 1996, 田中 2008)。

(10) 外来語アクセント規則 (Kubozono 1996, Katayama 1998, 田中 2008)

後ろから 2 音節目が重音節の場合はその音節に、軽音節の場合はもう一つ前の音節にアクセントを置く。

混成語のアクセントに関して、ここまで入力アクセントが出力に影響すると考えて議論をすすめてきた。しかし、日本語には (10) のデフォルトアクセント規則がある。入力アクセントが混成語のアクセントを決めていることを確かめるためには、(10) の規則が出力に影響している可能性を排除する必要がある。以下、(10) のアクセント規則の存在も念頭に置きながら、「右側主要部のアクセントが混成語全体に継承される」という仮説の検証を試みる。

#### IV 考察：入力アクセントか、アクセント規則か

以下表 3 は、(10) のアクセント規則での説明率と、第一、第二要素のアクセント保存の割合を示している。平板型で読まれた語 (24 語) は、アクセント規則に従わないものとして分類した。

表 3: アクセント規則での説明率とアクセントの保存

	アクセント規則に従う	アクセント規則に従わない	計
第一要素のアクセントを保存	5 (50%)	5 (50%)	10
第二要素のアクセントを保存	55 (71%)	23 (29%)	78
両方	20 (83%)	4 (17%)	24
その他	9 (39%)	14 (61%)	23
計	89 (66%)	46 (34%)	135

89/135 語, 66%がアクセント規則に従うが、第二要素のアクセントが保存される語は 102 (78+24) /135 語, 76%である。そのため、単純にアクセント規則が全体のアクセントを決めると考えるよりも第二要素のアクセント位置が継承されると考えたほうがより多くの語を捉えられる。

また、第二要素のアクセントを保存する 102 語 (78 語+24 語) のうち、27 語 (23 語+4 語), 26%がアクセント規則に従わない位置にアクセントをとる。この点からも、出力形の音韻構造からアクセントが決まるというよりもむしろ、入力である第二要素のアクセントを混成語全体に継承している語が多く存在することがみて取れる<sup>1</sup>。

さらに、長さの制約とアクセント規則との関係をみてみたい。長さの制約を守るということは、その語が少なくとも長さという観点において右側主要部規則に従っているということを示す。それならば、アクセントにおいても長さの制約を守るものの方が守らないものよりも右側要素のアクセントを全体に継承しやすいことが予測される。長さの制約とアクセント規則との関係を、表 4 に示す。

表 4: アクセント規則での説明率と長さの制約

	アクセント規則に従う		アクセント規則に従わない		計
a. 長さの制約を守る (第二(右側)要素の 長さを保存する)	39	(57%)	29	(43%)	68
b. 第一(左側)要素と 第二(右側)要素の 長さが同じ	13	(52%)	12	(48%)	25
c. 第一(左側)要素の 長さを保存する	4	(100%)	0	(0%)	4
d. その他	33	(87%)	5	(13%)	38
計	89	(66%)	46	(34%)	135

この表から、長さの制約を守る a, b にはアクセント規則に従わない語が 4 割

以上みられるのに対し、長さの制約を守らない c, d ではほとんどの語がアクセント規則に従うことが確認できる。長さの制約を守る語のほうが、アクセント規則を無視してでも別の要因に従って出力のアクセントを決めていることが伺える<sup>2</sup>。また、表 2 から、長さの制約を守らない c, d は必ずしも第一要素のアクセントを継承するわけではないことがみて取れる。このことをふまえて表 4 をみると、長さの制約を守らない語のアクセントは入力アクセントというよりむしろアクセント規則に影響されていると読み取れる。混成語のアクセント付与において、アクセント規則は全く無力ではなく、一部の例外的なふるまいをする語に対して影響力を有しているといえる。

以上、日本語の混成語について、その語形成とアクセントの関係について考察を示した。まずは窪菌 (1995) が指摘する通り、今回分析対象とした混成語においても右側主要部規則 (RHR) が影響力を持つことが確認された。さらに、出力の長さだけでなくアクセントにおいても右側 (第二) 要素が強い影響力を持つことが明らかになった。

## V 英語混成語のストレスと日本語混成語のアクセント

日本語の混成語アクセントは入力に依存するケースを中心として時に無標のアクセントが表出することを確認した。では、他の言語におけるアクセント付与はどのように説明されるだろうか。ここでは、混成という語形成プロセスを持つ数多くの言語のうち、もっとも研究の蓄積が多い英語混成語のストレス付与に関する研究を概観し、ここまでの議論で得られた日本語のデータとの比較を試みる。

まず、Bauer (2012) は英語の混成語形成において「少なくともどちらか一方の原語の強勢音節が混成語に保たれ、両方の原語からそれぞれの強勢音節が継承される場合もある」と述べたのち、ストレスについては右側要素のストレスパターンが保たれやすい傾向にあるとまとめている。また Bat-El & Cohen (2012) はいくつかの忠実性制約を立ててこうした指摘を更に具体的に議論し

ている。理論的な分析はここでは示さないが、Bat-El & Cohen (2012) によると、英語の混成語形成においては、左右の *base* と出力がすべて同じ長さなら基本的に右側の *base* のストレス音節が出力形に継承される (11a)。左右どちらかの *base* と出力が同じ長さのときは、左の *base* と出力が同じ長さなら *base* からストレス音節が保たれる場合と右側のストレス音節が保たれる場合が両方ある (11b)。さらに、例外的ではあるが、*base* のストレス音節がどちらも省略されているが片方の長さが保たれている場合、長さを決めている方の語のストレスパターンが継承される場合がある (11c)。出力の長さがどちらの入力とも異なる場合は右側のストレスが出力に残る (11d)。両方の *base* のストレス音節が省略された場合など、どちらからも継承できない (忠実性制約が働かない) 場合、英語のデフォルト規則でアクセントが付与される (11e)。

- (11) a. *mótor* / *hotél* → *motél*,  
           *rocket* / *ballóon* → *rockóon*  
       b. *húrricane* / *ballóon* → *húrricoon*  
           *ággravating* / *annóying* → *aggranóying*  
       c. *ballóon* / *páarachute* → *ballúte*  
       d. *insínuate* / *innuéndó* → *insinuéndó*  
       e. *electricity* / *mágnét* → *eléctret*  
           *simultáneous* / *bróadcast* → *símulcast*

この Bat-El & Cohen (2012) の分析では (11c) や (11e) のようなパターン以外では原語のストレス音節自体がそのまま出力に継承されると考えられている。これに対し、日本語の場合は、今回のデータをみる限り、アクセントのある音節 (あるいはモーラ) を保つよりも、アクセントパターンを継承すると考えられる。例えば、(12) をみると、出力は第二 (右側) 要素の長さを継承している。アクセントについても、本稿の分析では第二要素のアクセントを継承すると考えるが、アクセントの置かれている音節そのものが保存されているわけ

ではない。英語では通常、強勢の置かれる音節がそのまま保存されるのに対し、日本語ではあくまで「- 3, 4 音節目」というアクセント位置が継承されている。また、英語では一定数みられるとされる左側要素のアクセント位置が継承される例は、今回調査に用いた日本語の混成語では極めてまれである (13)。

- (12) ジャ'イアンツ / ラ'ビット → ジャ'ビット  
カルシ'ウム / サ'ルピス → カ'ルピス  
フォ'ン / タ'ブレット → ファ'ブレット

- (13) ゴ'リラ / クジラ<sup>0</sup> → ゴ'ジラ  
グラ'ビア<sup>0</sup> / ア'イドル → グラ'ドル<sup>0</sup>  
エネ'ルギー / ネ'オス → エ'ネオス

ただし、アクセント音節、あるいはパターンを継承しない時にデフォルトのアクセント規則が働く点は、英語も日本語と同様であると考えることができる。

## VI まとめと今後の課題

本稿では、日本語の混成語について、主に音韻的な観点において右側主要部規則が働いているという窪菌 (1995) の指摘をもとにそのアクセントの付与にかかるメカニズムについて検討した。

調査の結果、右側要素が混成語全体の長さの決定とともにアクセント型の決定にも影響を与えていることが明らかになった。長さの制約には違反する語も少なくないものの、これに違反しない場合、つまり長さにおいて右側主要部規則が守られる場合は、アクセントについても右側要素のものが出力に継承されやすくなることを示した。また、日本語のデフォルトアクセント規則との関係についても検討し、長さにおいて RHR が守られない場合は、デフォルトのアクセント規則によってアクセント位置が決まることを指摘した。

混成語は日本語の種々の語形成プロセスの中でも比較的複雑なふるまいをみせるが、アクセントについては入力アクセント型に依存するという傾向がみて取れた。ただし、今回の調査では話者が1名と少なく、データに話者間でのゆれが生じうる可能性は否定できない。特に、入力アクセントが継承されるかどうかには、話者の語構造に対する認識が大きく影響すると思われる。今後はさらなる調査に基づいて混成語のアクセントに関する分析を精緻化するとともに、派生語や短縮語など、様々な語形成におけるアクセント付与との比較分析も含め、研究を進めたい。

### 注

- \* 本稿は、2021年2月21日にオンラインで開催された *Prosody & Grammar Festa 5* においてポスター発表をした内容をもとに加筆し、まとめたものである。調査に協力してくださった方、研究発表に対してコメントをくださった方々に深く感謝申し上げる。また、本稿の執筆にあたり、田中真一先生から多くの有益なコメント・ご助言をいただいた。ここに心よりお礼申し上げます。
1. **Broad (2015)** は調査で得られたすべてのトークンを分析対象としており、この語は後ろから2, 3音節目にアクセントを置いた例も示されている。(5a) に示したアクセントは主要部に対する忠実性制約が上位に来ることを示すタブローで分析されていたもの。
  2. 4モーラで語末に軽音節が連続する外来語は平板型になりやすいことが先行研究で指摘されている (**Kubozono 1996**)。今回のデータ中、語末に軽音節が連続する4モーラ語のうち、平板で発音されたものは19語であった。本稿では平板型の語はアクセント規則に従わないものとして分類したが、もしこの19語をすべてアクセント規則に従うものとしてカウントすると、表3におけるアクセント規則に従う語の合計は108語となり、数の上では長さの制約に従う102語を若干上回ることになる。ただし、アクセント規則で説明できない語のうち、長さの制約に従う語の数は23語と大きくは変わらず、依然として第二要素の影響力は無視できない。さらに、19語のうち14語は後部要素が「アイドル」である語 (ゲーム+アイドル→ゲードル、バラエティー+アイドル→バラドル、チャイルド+アイドル→チャイドル等) で、今回平板で読まれた例には後部要素に大きな偏りがある。今回の調査では話者が1名であったため、平板型の語に関してはより規模の大きな調査に基づき、その振る舞いを検証する必要がある。
  3. 長さの制約を守り、かつアクセント規則に従わない41語のうち、20語は4モーラ語が



## 日本語における混成語のアクセント

平板型で読まれたものであった。平板型で読まれた 4 モーラ語の中には、どちらの入力のアクセントも無視しているものが 12 語あった（このうち 11 語は後部要素が「アイドル」で、残りの 1 語はバドミントン+ピンポン→バドボン）。表 4 から、今回のデータ中、平板型で読まれた 24 語をすべて除外すると、表 5 の通りとなる。

表 5: アクセント規則での説明率と長さの制約（平板型を除外）

	アクセント規則に従う		アクセント規則に従わない		計
a. 長さの制約を守る（第二（右側）要素の長さを保存する）	39	(74%)	14	(26%)	53
b. 第一（左側）要素と第二（右側）要素の長さが同じ	13	(81%)	3	(19%)	16
c. 第一（左側）要素の長さを保存する	4	(100%)	0	(0%)	4
d. その他	33	(87%)	5	(13%)	38
計	89	(80%)	22	(20%)	111

表 5 から、長さの制約を守る 69 (53+16) 語のうち、アクセント規則に従わない語は 17 (14+3) 語、25%であり、平板型を除外しても長さの制約を守る a, b のほうがアクセント規則に従わない語の割合は大きい。また、表 4 を、語末に軽音節が連続する 4 モーラ語のうち平板で発音された語をアクセント規則に従うものとして修正したとしても、やはりアクセント規則に従わない語の割合は a, b のほうが c, d よりも大きい。ただし、注 2 にも述べたとおり、今回の 4 モーラ平板語には偏りがあり、話者によるゆれがみられる可能性もある。この点については話者を増やしてさらなる調査・分析を行う必要がある。

## 参考文献

- 太田 聡 (2003) 「混成語制約再考」日本音韻論学会編『音韻研究』第 6 号, 63–72.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』東京: くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (2019) 「語形成とアクセント」岸本秀樹編『レキシコンの現代理論とその応用』, 49–71. 東京: くろしお出版.
- 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹編 (2015) 『明解言語学辞典』東京: 三省堂.
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『日本語の音声・音韻 (上)』(講座日本語と日本語教育 2), 233–265. 東京: 明治書院.
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京: くろしお出版.

- 長屋尚典 (2015) 「形態論のプロセス」 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹編『明解言語学辞典』, 60–61. 東京: 三省堂.
- Bat-El, Outi, Evan-Gary Cohen (2012) “Stress in English Blends: A constraint-based approach”, in Vincent Renner, François Maniez, and Pierre J.L. Arnaud (eds), *Cross-Disciplinary Perspectives on Lexical Blending*, Berlin and Boston: Walter de Gruyter, 193–211.
- Bauer, Laurie (2012) “Blends: Core and periphery”, in Vincent Renner, François Maniez, and Pierre J.L. Arnaud (eds), *Cross-Disciplinary Perspectives on Lexical Blending*, Berlin and Boston: Walter de Gruyter, 11–22.
- Broad, Rachel (2015) *Accent Placement in Japanese Blends*, MA thesis, University of North Carolina at Chapel Hill.
- Katayama, Motoko (1998) *Optimality Theory and Japanese Loanword Phonology*, Doctoral dissertation, UC Santa Cruz.
- Kubozono, Haruo (1990) “Phonological constraints on blending in English as a case for phonology-morphology interface”, *Yearbook of Morphology* 3, 1–20.
- Kubozono, Haruo (1996) “Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation”, *The Bulletin (Phonetic Society of Japan)* 211, 71–82.
- Renner, Vincent, François Maniez and Pierre J.L. Arnaud (2012) “Introduction: A bird’s-eye view of lexical blending”, in Vincent Renner, François Maniez, and Pierre J.L. Arnaud (eds), *Cross-Disciplinary Perspectives on Lexical Blending*, Berlin and Boston: Walter de Gruyter, 1–9.
- Williams, Edwin (1981) “On the Notions ‘Lexically Related’ and ‘Head of a Word’”, *Linguistic Inquiry* 12, 245–274.